えんむすびのきく

縁結月下菊の巻

柳亭種彦著

五　早へ深てあつまもも妻撫様

其次の朝清十郎又偽を立見てかきくかふむろ人但馬屋の母撫様ふ事紙十三あげ〻ふ〻れてそくさんを幸るれ志勇ゞ留るを

その間ふ清十郎を等ありどうそおくべきあいさつまづ四五日八娘をそゝゝさふ留ゝ有ゝ〻ゝれとゝいひてきこれ〻ゝとまつらくんれば是ゝ

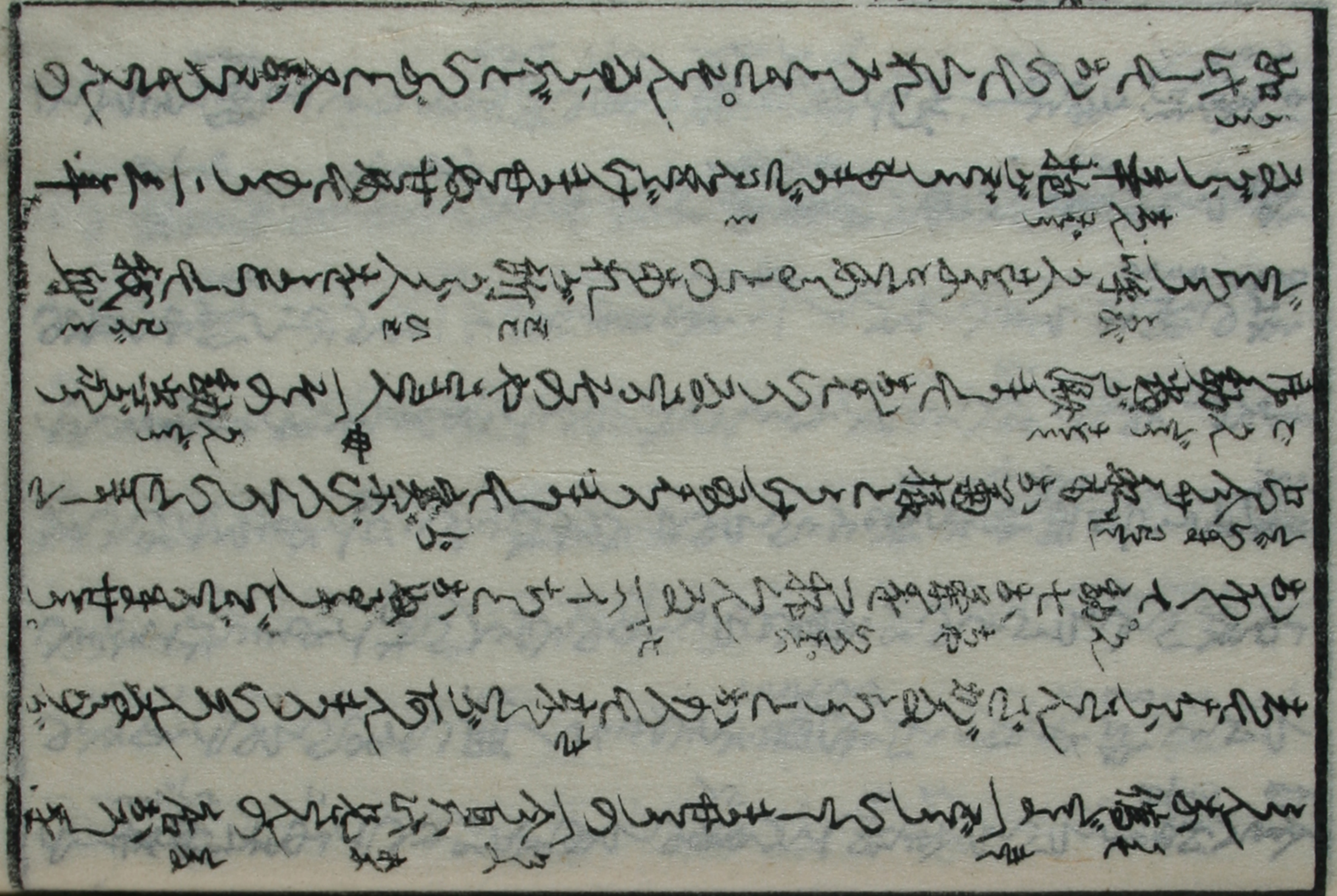
ゝら金屋へたゝゝ連ゝきゝ伯母撫ふ亀屋へたゝれ

又例の口ずまをせこれへ膳魚が大腹をとも頬をとく色鱈をそ
今西きこべ喰つきそんその数りをるぞあそからとちぞこつきをつ
一日二日ところ不きこびひか豆も居るぞこそ原本夫とこぞまを
人こ出べんもおそれぞと深切不いこまろそこれるがうをきくくと
六日だろうきぞこがある時不ぬるぞの動七あこ色くこ歌
なぐり「且那さるおふくろ猫がこと下ふかいぞるころをを
ちけるそれべちのお方へ出猫ぞ高ろ外へ縁後もこぞろこ
こう。それでへぞうも一晩もそあやこそへ激まを色ん和不あかくし

なされてあんまりなるこんなことにあんしてあるとかのいとがと
りよりちふもきゃの母へ引つれてまやあるうさんあるさへうく
ふうりあぐうるかあるうちうこそ　うへこそ
なるあげうすしー清十郎へさこそのこまをもう　あるうまへあまへあどの世の中ゑあまこまうあ
つけてうぐまるを母へつれぐちまりう
とりあるうよ「ざんくうそれりうまうと「きこ」喜助こうへ未あるえ
ざこそ私の母あおおひるまれまうと「母」ゑあおとうや兄さんぐまよ「きゃ
いうる「母」おまへのるうるいるへいるいる今度ぐのるへんえる兄さんぐいるい
のぐ元不具邪孫ぐさうあうまゑうとッけうるうへあぐぜあらぐ
そこうの兄さんぐのゑ牛どかう者をうまへて

ざまるくとぶまつぞ　ぐんア
ゆれハしされゞ名ゞ清十郎く
きをあらうが馬屋ホもるとも
りう私のりゑハらまゞホちろも
あのとりてえんゞがさうぐかうち
だりりまをあらうぐ金ホやうも
おまゝ人の細ユゞと私ハ知ってゆ
の出まるまるの所くさうあるまるて

ん　ぐ　ら　ん　ぐ　ら　ん
れ　ざ　ら　ん
せ　そ　ら　ア
ち　ま　ア
ま　ま　ア
ち　ち　ア
ち　ち　ア
ち　ち



傳兵衛と申候て也て段段橋の角の地面をとうて新しきうち
絵ぞうの違ひあへ申候衣類をかくせて八上てゞ其上の此且那のゞ
私の所不てまつくく丁度前者不一ぞへ乃ゞ後の直人の
人ゞ一人ゞあらうとんりうとれぎうでゞまつまもうぞ
是をとゝ百両包を給ふらうとのやゝ赤ゞ有る口ゞてもさゞおりの
紙しのゞらうのお面ゝゞ人ゞのゝゝ人られてもまれてまろ
らうゝ私をもうしけ色男をゝゞうとく囲つてあらとあゞゞ元の
金人はをとゝ金所でゝ家のゝあををもうてをを動きゝ

あくれどまづ内へあく方が新しく世俗がとくるまいる所
てもの内へくられるうまで家出れまくあるもまるうえ入る
ものでんあらとたらぬ引負をとる氣づひのうちへ入余
わをまくあくつうりづらうがぬ金がそろらく出そうて勘
づうるいあの通りの見世の者もとろうこして且那
さまへいろあうう食られまこのまんでゐるやどづうう内の
事をもぐれがらふう高きまへうえんる筒抜居動居足がよかる
ちうぎ祝義をうこまこまこまも今年も僅見でおそれ

付きまへるまでぶまつ人の身うけふいろく時へ衣そう明晩
且那様のおいでをとろくその時ふ大変ひらく〜まつ〜へイ
お衣が身へうけふなるまこと様が母ヤ動へ衣ちらどろ衣ア
夕べ肉ふ晩一ません母ざえる母様ぶ私へそろとあろまるやへ
落ち帝へ時毎晩肉ふるいもうとぶらうそ蓋人連く
来て寛がれてあく方が安い番ふ付ぶらうと縫へふうけるろる
かくおうくさんの所へ逢ふいろそ出まへさん家私ふうふ今夜とぶ
みも運てしうがまへんせん肉へ直されば今ふ様でもぶとふ

邪魔でもさるぜん世話いるるなぐどうらふ毛ぐどうらふ
りうくれべ私の身のうくんあるくふかまうせやまとまとらまう
みとのうくあるね一衣それかふあるくぐ円能へ掛合ふおひくとろて
ねんき年乗のへ僅てたのうくれど借金ぐどうんとあんくるさうくと
皆お拂ひかんふお金のらいきろんかもろくらあ二時だうりふ
だだくくとかくがつのくるふ舞衣負まえいくろぐどおやくるくと其
時ふ私へぐどうくひふてて三ッだりり踊っていくくるれはくく
ふけそのるあんふきろうまふるて眉毛へ似あまらいと剃刀を

但馬屋後家

ろくでなしの利かぬ気と
とそろへたる片の山眉毛ぐ二色余りもつのそれハ
七
さやかなる直ぐなめのさきうえまそんじまさどらくでまつ
まゆげ
まぐ衣ハおくゝ中レ丸げまして其うくの眉毛ぐひなそ
うくぐ衣ひとうまとと高ひのぐらぶ形合ゝすやあまくもおあ
おまめれぐのまゝ濃をおぜよそのあ時晩見那様が美屋玉ぞ
みまとろくをとろぐ口ぐあげゝ行ともひそぐ美
衣きまゝ

いとぐいこそぎ小舳をこぎ入くそろ者ア中年中のぐ成らびこそ世ぎ不
きてゆきけとそそそろてたろこ二人りで家屋の掾ろうとそろて
ぶえる且那様のお藤ろう様ふくまちろてかろうるひきうしてひるきとろて特ておいぞの頭
おろぎ紙ちろう伺人う来ると思ひるさとろて特ておいぞの頭
を中ふおいて一すとちろぎ徒ちぞろくさもぎそちゃんるびめくぎろ
しろのぎとおろちるとそれろうんろうんるぐ法師の唐礼を
りろて一下さろぎ舞曲屋かろもちぞひさてちぞひろくを母
まいろのどぬるぐろ於を並べて出て時の子暗ろくろ

もちはおもふてろさ様のまぐ
まぐんちかんてぐのそれか
ふ深沢の寮へおくとまぐ
さろやたたるおかろたろ
ふぎやくおまくあてる者が四人ぢろの男女でんさぞ
みるまろうとおぐまくて乳のぎくでぐろうとる乳ぐとまぐを
さのんでなれおかぬせてろ
ふあるうちへなの宮をぐ制てやろてか
おままろ面白いるなてくぐ何ぬくてすさくぐでんを

るいの門へ長あいまつ人でなかれば客といふ物ばかりあるな
ぢやアを連てきてぞろぞろとぽつぽつ腰ぶつぶれて猿もちら
ちらぶくかくづけさが中がらくてそれへ安堵これでハぞろ
おうさんの結おろくまつ猿つてもきぶどきぶ年増でもきふどき
げんをきくぞくかくふるの形拵せうと紀者えんざうき
さ多くまるらうが薬除掛の縁見へらうがふぞろとあんとぶ
ぞそれうら馬産アるぞ彩ぜて通りの娘をきろくと見てまき
ゐるいてもいとうふ陳ぐろたのもさそくなのの金たがきえさ

出羽の国の山の麓にこうぞ紙を漉の障子紙を加賀屋の
娘がきらそるこぶ紙と私が目ふ付て一日ぶらくらそるこぶちらと
ちらちらぞ色も余り白くもなのがいきいる部よ懐てふくり
ぶらくらおまえ人の気ふいらくらと見くらくらくらくら業屋で紙を吹せて
おいてさくらぶでもるい出帰りくらと吹いてこぶ初縁のやくらとそれで
お前と取かくるお供を極めてくらくら白歯でもくらて板張ふ
つくり
粉ふ去てそかくらくら。出りぞり鉄瓶をつけさせて付まくらくらふ
風ぶ気ふひらくらくらと懐熱をまくらそるふ仮のこくらくらなるふ

ゆうぐで面白くまるいあんるめ。今のうちぐ人へ知らぬ早く
そうとかへしてきまひる二端絡束きそのかやうにれべ兼
理ゆうくるあれを直ぶ円へくくと和もまぐ老持さかぐとらふ
でもるいらのそれぐから他れ好かぐびえ人の自由
ふるるまへのるをながらおいるあのとこ見赤へぐらひ
ぐるトふれ動せへあくくろ振ぐつけるぐぐそれいあるる
ぐぐぐぐ振ぐ振ぐ振

そこらが又為且那の持魂がおこりて出うけて時ふか菊でこそ私が口ぶ
出ぶしふくろい他うふ来こ嫌でこそ記の法うぬ事が有ると私が側
かふ智裏をうけでそれでいうぬと是ぬそれとおりのれ粧
かぶうふせて遊んでそのさき人私が連れ遊ておうけるさうふ時ふ
ものうぶごとめげさうもうくてうい「モシくそれへおあるぬ
ぶえる且那様も長今かうとえおうぬうぬうどぶうませ「何
例の狼さんがぶ菊ぬぜぐぐとぬておのぐぐかまえいうぬ吐ぬ
ぶうぬ金さがううかりおう菊が参死ぬそこさを種おうぬ

幸助でござりまもとゝ
ふ遠ひあるまいそれとも菊で
ふいるらんべまぎ結納をまうけ前持せまいとらひいまア
一日でもいひぢやうをたたてうへ〳〵。ヨポ。ヨポ。ヨのはどとゝのらざれば
お春きこのぞくさいそ動え
七ふうへおあ仏あまとゝ和ぐ
ふおふうへりさまのお箱のうちへとろふうと
ふけあるておきまはせふ今日はぞうぞお帰りなさふて動セ
さんおまゝおゝ彼を見せまのぞへ何ぐ
られぬが途中までお送り
まふさそふ
母
「そんるふお長まふせておくよかくりませふ
かやそ。
ふふふ
ト二階へもしどおり
モシおまゝ刀切でゞ頃惣兵衛おふひぐとふあとゝへ

松が難ふつゝ車海老がゝ取るの時どろふ形うふの池色
しゝ　ゝトかゝうゆく法十　年八かゝをあゞ　〇今ゝがゝ蓋もねへ　ゝとゝまでイヤとゝまかふ
りけゝさゝ長時代ちゞひぢおらテ仙女をゝゝ　ゝ　ゝ　ゝとゝ
ゝゝ谷猫とゝふゝ正本知りゝぞや續ぞゝゝふ仙女ゝゝ
屋り役ふゝとゝゝうゞきをゝくゝせゝくゝふゞゝんと今ゝのゝんぞゞ
ゝゝ役者でゝゝゝゝ知ふん頭の物ふゝ乳ゞゝふゝゝ機ぞゝゝへ
ゝ鞄ゞゝゝくゝて法表ふゝゝが一枚機で取ゝゝゝゝ
ゝゝ余程むゞゝゝかゝゝゝゝ

駄いうちゐぶろ花ゲちち少くはえる。それハそれとお湯ゲこてふ居る
の所ぞうしてゑうさらう長それハ今ハけさ薬湯の薬をまぜられ
給人うちゐのおゆを連まうしてゐること時ふ向ふかゝ長そうく長ハ
ゲ本さとさろたりうさを長れさゐのうぞるゐやまううくあやべる
やうまう長ゐまゝ仙てさとゐうぞらうそれいいくゲおうくうきんへおまゝ
の返るゐうぞうゐのぞ長お湯を女房ふうぞさるうう勘当を
ゐるされまをうとれかゝゐまうくまゝとそれぎうそ事ぜ
長そうゐのおゆを一日でも二日でも長かゝさまゐわゝそれハ

おまぢぐ親ぐさのヨあちぞり備いぐるい上ぐうろうかぐまと秩
父母の元へそろうさるぞ母れ指もされまち衣ちふん
それで極りとうそ。モシお菊さるぐ亜まあ兄ぞ君ませる
さアお菊をおあげるさろろうんぐ邪おうろりまり
ろまちぐ八おあいさるとるるぐ巳ませぐ亜助極ぐと私男
て衣おまりおとるぐちらさくぐもうくぐまれませんぞ。ぞ古
あまの様ぐでもくるぐちらもかもうとあるるうらひろうふまるぐ
まのとうんるぐあんまるをぞせうえのあんる亜おまるとぐ

内ふかいぶさうにんもまたこころへ申けとふあろうさんの
あんまりおかぶとうとたんまさと幸助さまもおあまさま
ままもまぶさうにもまたうにを〜こまの行へ根ねふう
お屠〜ゑ扇ぐトろうしぶらそれをまぶふ新あてあさん
衣「りうく〜それてゑうまうまうまい〜舞衣さんく衣「ヨヤりぶる
うんぶ人へ竹まうしてゑうまうんがあんまりお年ぶうれん
かう継新造も貴ぶをれる衣「まれどころぢゃ新人元
ろうふあの子供りそおうまうまあろてゑ申るふあの申うる

昔へだうきん今どの御とうきんあぞぶれかあきづまと内
だうな子がが好きうるさ〈イヤこれへ挨拶
○加賀屋のお夏へさ〈頃彼但るの屋へ絹屋世くそうり
癪といろもり戒名屋のこと引こうり今度まぞへ結納をの医
おきあそれと人を頼こと父おきこうえぞうくと医られば
おうく砂糖屋も童・助と娘がひそかひしまを石
づきそつぐ思ふ仮るの屋うまぞ結納をも結ぶれば
変替へ変きふまそれど段年を脱おそやこうたれば

深草のうらん織せもうらんをとゝ人今更新りをゆるしえん
と仏不慢熱の夏の日をさゝ日まりて懐姙の著明が苦し
乃至ごとりより白地の浴衣ぜしうまぐ不来ぜしう
後金の塔の辻子の麻ひとり有りうの伯母ひまぐ
かゝりそれより父不いそせん不来くとゝをさゞ狐更
つれかゝと幸助不かゝひたゞ道ゝ
徒引られ
事とおり人ど徐方不己もこゝ不つまり新所ゝ紙不
ゝひお夏不我相織をうちさゝ度とうぐ菅笠手も

顔かくして人目恥ぢて男姿ふとりくつろひ夕暮の
さとびくさぶ不寝路ちまぎれ出て篠倉へちそ急ぎぞれ

〔六〕見入へ外ぬ戈目

清十郎八母のかくて有をいひ出て菊屋の機嫌を
とりそめるとしがゑのうちふかくそ有ぶべ明日ハ
久兵衛どふ菊屋の催さいそくんそれもうるさく動く
七ゞ帰らねさらぬ不めづらしく祇園をしてそんと思ひ全
ざれ
澤の刀切の我別莊きさぎ景色よく夜ふんどん海老を寿

光の見えてゐるのをいざりろくろのわ連ぐるんとまきとめけるが
物ものいまちとかたりて何事もおつ爾ひらかが使まるものかくもと
呑へ乃ろれバひひ合さるど是も又娘姿へ目ぐるんと動七が旅式
ゆきをひ〳〵風合雑巾をぐるんぐるんぐるん

自害ふせうう引く動七ゲ帰ゥくうの已れ撰人撰て高う飛好
平（菜花をつけそ嘩月まぞ不百遠うく住生所らひつひさせ
てムうれ四月たく稽ぐまりりと細下ひ八二すぐ〻ぞ八菊八イ
十八イーぢゆアヨういアイーとひるそれ千ヤンと伸瑞橋へ取丸へ
ムうふまうせそさまぐのうたいひくまぐさあてたあ光執夜
れあふあうひるまの切通ーまぐきうりーがお菊いうまう人かしとまり
そてうとそんぐまうそ表つけぐまるりまうくうもうう鼻徒ぐ
見ガらくくてあるれません十二月「鼻徒ガお見を食うそれ及
さと道をつりぐあるらくるいあるまやまく鼻うそ
遠

晴ー　トあてうの発を色てイヤ天の助けうまうまうま

うさひ
朝比
奈の
きりを
切て
通シ
幸助
清十郎初て

面會

うるはしく結び寄せ給へる是
ちゝ母どもく
かゝへ桂川と出うせ給ひ
目うへがなくト
ト
だりの又内の方へ出給へ
ト
幸助
ト
ト
ト

ちうてうを待る後のかさうぶ法十郎「ヲ」それぞく。駕籠のうへ
お夏をあのてたせうへる孝助助はとうえ
のせうをまつ〳〵ぶ笠ぶうとうぶまつ〳〵かふけーかんぶ雖急の
多紙十「いやもう兼おんぶ」おくびひとうまさ
らうの「ト左右方女をとうかへ」お名へお菊さまハテ結
十郎「お孝助ふうとぶ」「女中のお名へ」
十郎「ハイさやう。ぞ私の名を孝助さんと」とうまとんりー但るの夏那拾ぶん
お夏さうんぐるぶ笠だうぐうとうぶ仰さかけおちい結納を更
されさうみも是でいしまとう幸助様と笠ちくきた

ごぞうくそ孫左衛門さまへ知らせぬ私おやくそくもうも
それはまあ似よりお菊い今の母の実子ぞ私とは流腹
別はあるへきまさぐと見抜さそれて通りの表ぞめそ
かまへも面目ぞらもごぞうくまもんと見を退きうとぞ
まうしがぶふぞうくまうふおそれいくしたはぶんが十三のあ
ぞんこまうまもとぞちらでんかの屋へ瀬ぬそもりふぞくん
似るとこ屋へ義理がかけると今まぞくんおうもせうゑ
もきこづ是でんかくらてさそうとお静ふすぐをそまうまも

ぞれ（もかぞえられぞ）不和の別（ぐう）（さう）人（にん）ア歩（ぎやう）同道（どうだう）しませう

砂糖（さとう）さまの居（ご）者（くしや）労（らう）をなされぬ女（をんな）ふ人（にん）をあげて忘（わす）れる

がたくびヤシて母（かあ）ふ亀（あひ）なされさうに（ぐ）歩（ご）お供（ぐう）をなさるべ

き様（ざま）ときもちやうどかんぐるヲイ二挺（てう）ともものして

賀（うで）る筋（すじ）うまく

ふ人（にん）ともろこび「さあもかくもよろしきまうふ」十八イ。そんるかうと

赤（あか）ぢ瓶川（がわ）家（いへ）人（にん）百（ひやく）かんさうヨイ賀（かで）る筋（すじ）屋（や）さん名（いそ）ぐ家（ぐう）人（にん）で平（さう）ふ

「さノふ」十ラ人（にん）とちどる名（ぐう）ア者（ものし）よるくト

わどるすくらの別（べつ）荘（さう）ふ

ひまろ屋（ぐう）をひらき

「けーかりうませどこれハおそびろ歩（ご）桑田（くわでん）をあそび

なつこるをるぐあ

て、素円は、新も古うなり。お菊さへとるべくさぶ、具那稼ぎさへおつれ
まうじるとまうしてお　おちうきうり　○その次の朝、但馬の屋代を急ぎが屋へ
ゆき申せ　つげし　とのことを申せ　ばさぶらひを出さるべきやうを後ふ
あらうとてべしとのことを申せられべさなふべきぶ代方まで浮後のうへ人
あてまるらんと三三月に来ざうり其ふ文ぞうちへ到来をとまづ
出る
出られバお菊お夏ハむまくく風呂もいろ高よふ製も対と
更ふ若影の夏さまうり其ふ考ふ出菊ハ稽和ふ言
られべあらくハむつるぞもお夏ハ年ふ馴古のう

をうちえるかくるゑも縁るまんとひねもすべきけしきの
あさを推しとうくとおち菊のもかくしらひふうきてるべし清
十年へるをさうるを日毎日をかけめぐり所へうつり彼方
ゆくと大工左官職人ようびゑ毒繪の往来雑
毒助のゝ気の毒素徒宝物とて日をおくるなさて何所へ
ゆくを馬鹿きゝろう但馬鹿の母ホたちまちて面會するそあるべし
かくの接拶をそもつ巳その後へ至ホ何ろ面目なく悴事がゝ
ちぐで。否浪めぐる不始末と同じ中うるを事をしたそ

なれば次の間へ入り出て、新八郎殿と申し、
代ごとごとごとまとと、トらの右衛門清うち長り
を長ふいぞの〳〵おいでなされまして、先ほど機嫌うう。
さて此度の儀ホつまりそ支配人ども申後ホあらびまして、一トト通り
おたちなしなかげまはせうおかるひまはせどん伊達屋く
どひ伊兵言を。ホるとと孫の方ホ夏孫だろうるれどお昭とホ
なされまととお出ずがあるとそうそれ有ホまと人ら人伝和定と
きまへお夏孫が氏頃お菊へお出がどうござうまこそ初て

教知らぬまゝにそれいさゝか眞まゝ。婚礼と葬礼の式
法式同じ事ゞ武家方でハ毛地獄の斗目姫へいぶれも白でもち
ところきゞ後向ハ輿を舁先ハ門出ハ拵ひて座敷を幕でぞろくと
たゝき出ゝ只踊拔ひハ式ゝたゞなだらう。婚礼ハ門祝言吊ひ
ハも門義。ハ門葬の後でゝまゝ式中吊ひ宴も宴吊ひ
ゝもゝゝまゝ拵の門ハ戒名だらう式ハ送ゝまゝ式
ゝ式ハ式ハ式ハ

唯おもの四ハ宝ぐ菊と名を書きて紙だうれ
賞まうせうその名ゲまるりまゝふ夏様ハ菊様と
さぐ不お名をお改るされ衣服ハその丈ハ世間
るゝ陸奥様ハ夏様でもお名もかもうゝ様ハ前の三
七宝まるゝ不清十郎ゲ妹をおうびもうゝるされゝも同
事でおさりこのうゝ方へもその通りふりをして
ぐうまゝとお菊をお夏と改めさせ侍黒方の菊の
役則あるゝのお娘ごさまとれべ一端侍来らゝ麁末も

ちもせもろ〻さらに佐三郎
〈さやうなるさまれてしぐさされば佐三郎
大不えんど
不をさまりまうさと トうちうちとべば佐三郎の母も喜ぶそれ不きぐひ
佐三郎八お夏幸助をうれしいそぎあ家ふかく〻猪助
おるど 日不元かそして婚礼もおるど 日不さりきまえあまとて不をの日佐三郎
元ないあるかるかの宝
あるど 日不元かそして婚礼もおるど 日不さりきまえあまとて不をの日佐三郎
夏八お夏と名をあらあ白ひく 喜ぶ人てえやざーこ人
りぞんとさるをりうだ女ゆく〻〈さうるきかふ来〻さかくぐお運まうーく
さもうれげ入りきさり
きさお客のかくりがおをさふやろと今さァおまえ人間ちう人
巫女
おそらり トりりう女のそをうち〈おろくるを母ちこ
えて佐三郎八おぐろれ 佐
を運てきさ〈れ八おめでさい〈うまおめでさるすぐあ
ふく
らうあれがりうぞやれ男ひぐでそ仲ある悪しく

る「まゐ」お此さいまゝ和も苦労さるり
未ゝ七代人〻縁切の祈願をこの三人りの
くまゐりまゝ日見人の且那のところのお夏様と
幸助様の幸でたいふのうそれるべ縁切の祈願
かうまゐてあるとしるそれまゝそれへ何人ぐ
未ゝ（こゞく）れば（トかゝ家）まり鯛義さんでこぶりまゝとゝ今後
南の方の縁がたくさん未ゝ遠方いるいそれあ
おまへの郎へまれかトまゝ鯛義さまが見ゝ

且那の娘ふうふ出家の後ふるまひ
切くそくておまへ方ゆゑ
て氏子ふうそとふうなでも出もりれ
お頁様を他へやる長ふしそられ佛様いられくざと
ちやう帳ふ書ぬいそられかうのふなんだのふあれいぞうと
まぐ細くく書てくぐさるまりくさと
ナスものでとどうませんが序とまへ様のお寄ざとあるる
るぐどうまとかふ氏出ふ佛様の乗ふ法くと親を

しぞ。おとれ（佐）ちうまうく今夜（とうや）それ
ぞれ内（うち）をえとあ（あと）ふ半（はん）ぞ（ぞ）ぞ（ぞ）ぞ（ぞ）ぞ（ぞ）あ（あと）ふ（うち）ぞ（ぞ）ぞ（ぞ）ト者も
あのりづさ（かぶ）まく（トのをおきく（ぎ）ぶ（ぶ）けて（ぎ）「それぞ（ぞ）ぞ（ぞ）ぞ（ぞ）

おまえ方福ゑ方菊ゑ方ゑ方れへ方菊と名をえて方夏の名
と縁が切ておまえの形様の驗も見ゑえ。方ゑ方ゑ方遠まろう
れ
とまそくれさ馳走をまろうもぐいく是えでいるく氣かかる事ぐ
を
あくろめぐさらく「ハイ」形もあぐぐろく亀のゑ煎餅鶴見
まえぢう
の饅頭ばりうこんぐまんうぐさせません夏揉ホイ方菊揉その
時方ゑ方ゑふこまろまろまろく「方ゑ方れへ」ト方へ佑「さア方方福も
きゑこまんゑも揃って待てゑる之是ころ祝言めぐろくまろ
それろ後但馬屋と親類ろろもまろく形交方菊へ

月満男子を産む酒屋のお茶幸助夫婦又ふく岡氏
日々繁昌いよ〳〵富貴不学しとらんまでそれまづ加賀
屋あへてたゞ物借るべき事もなく一回の目録不。
かるべ義で遣る振名。と偽字書くべん巻尾の趣向をまづ
さい〳〵最初のあらすじあきらるあり此草紙の目録はさぐて収月若義
をうつられべそれよりまらよ又後世の時代の前白付エ字白青とひがまりて
物は附よ出のがらに似くるあり
久
改て従二位へ加賀屋とおるべきまれべくそく二云むと見ろう
して清十郎武見へ更あもいんそど常日あも徒をひきうけて

掘原様筋父様その他おもき所出入屋敷の座様をうかがひ
ふうちめぐる事きげくるり原来ながる口がるを巳き男ふ
ありそれべそれくの掛りの者ここに十郎の長兵衛そこでも
但馬屋ちでも但馬屋仙ふうふうどのひつそれべ仙ふうふうどの
清ちそそ長兵衛ハ勘七ふ仕込せ者そそそれそうり納め長乃
長書画ハ自分の用剃小間物ハ雑雑ハ雑雑ハ雑ちそそそれと
代のそうちうう人を見そそ居をこせ屋長方の用向
をそそる毎ふ乃それべ来商ひのその他ふ仕分の法く

事あるく出夏と中の睦まりくて遊里へ祝き事もなく
されば彼屋根かくり今の出夏をもちぶかく見ぶをを〜
のくふへあらまど母の里の子なるを吹我身弟うおそ〜
うぐ屋へ脱入させんへ道まあらまど已彼ふつれそひて身をあち
加賀かくあ今まぞの恩おくりふ母の仏を生きあんそめそらひうり
そらい此時ふ潮まりて感ぎる者きくるまかぐまど又長年の秋と
やらん山風さらげーく猛会の町へ更なり屋敷を吹あひとる
事のあり五そふ破損のつくろひ又へ新ふ建なをを備

方の普請一時とまり桟木具く引くらべ比時小清十年の例
の金を をうちめぐり若桟木使入用ゆえ 何程とと取
ふくさ〜あげんとこらひられべその掛りの人〜当義のとと
いひつとめ具貞の清十郎何方へもも幸のとも高ひく
絹のつ人ゑそれ〜小絹文あり分〜とまりひとそ引遣
事一大道ゆり但るゑ屋のち文配人ひと不審とよあ頭
ざの者二三四人清十郎ゑ出 具度その元晨物新へ
ゆで居ゆもぐゆ買ゆ人

むまの
娘へ送あまてこぢ嫌とるう
娘へ八たゝらぢど娘とゝて
いつゝく楽〳〵き但馬屋の
母へ首蒲の紋郎勾の日
梅と桜の連彈を
吹のんと
ちまつ
不思議
あゝる
図

きさまを世ようが見つけまゝ今まで取あげられ
ようとさまを世まを世ようや紙ぞもまそのあと不安ふあんと思ふ
眉をあたまれが清十郎
笑ひ
「おれが二度目の身うけをしる化粧坂の花井筒屋の花浦と
女郎ちうる信州で名をきこえし十千丸屋の限のうぐいす
おそし
一昨年國から出てきてうぐひす所へまそめるかふ十
丸屋の抱え
がつく身うけの金を倍をせうかふちらくへうれまらうと人を
たのんでうりてこそ花浦をゆきふとうがらのけとうまう
新ようとうとうふ今の女郎へ利口ぞもまをせんあれいは肉へ法れく

達入やうの格子もうえまどあちらへ曲げまして障子
造作とらのかへけはぎやうの篠金をそんなされて四六言
事ぶそこと家和のあらさうして金のうすいまんをもいそまどもし
屋とらのわどでもるひらがまりア者まの君あるあどあへいあ義も
持せてもまもとせかくへ移者をつけて倍のそのうへ人ホ
増入金をまをそんなかくへ陸奥のおふ者ひらてきまをせうず金
玉あへかあびまをせんとかくへこへきやうがこうちがふとらのつよ
十ホ危へ本者みを廣天もまく持てみまくイヤ大造ホ

身帯ぶ　あんの案の
定それ〳〵かくして迷惑をもるからと又ぢきに持せてもこと
ところで已ゞ使ふにへ若当地に找本の入用がござる
節は飛御でゞあげませうと見へその店かりを賄をと金を又かく〳〵
さらあちらぶでも満足〳〵そ物ものどもそろそろふさいもくを
ひっぢませうの純文ぢまるぞそれものと勧ぢ言のもの
うもふあんくさん〳〵居ぢゞ中に二金も私用ぶ私用に
法ろ例をあるは島の島ふ伊豆房州あもの

船都合の為に陸をまつりとうりまつさ何氏伝多
桂木へさしてあるぷゆう三年ゐぐ勘当をまとうて
かいてうぐまつしてとうりうのへ氏訳ぐまうんぐ折角ゐ
おくまうれと今をまあうあと掘ぐうくゃうけり氏桂木で一ト
まうけまをおあ屋うまぐうまうり待てまうらうと思ゐ
ぜんご前後まうくぐまうくそれへまうぐうトうのをそれい
きうて
まうゆかそるまうート皆きまうぐきまうぐ音緒方へ
ひきゆく花御をを紐来うぐそぐ桂木ゐうく花御山入

屋敷の人用を十分にそなへられたるよりて首尾よくすべて
徳行勤定を表さるゝ人なれば最多人今義を
積あげ程ひの酒宴の席の冨みへ父の画像を掛おきて
もてなさるゝ母。次ぎに清十郎文輝その他一家一門居
ならべく支配人及代々ども皆そのらいぎて代度みなぎるまで
至ては骨折りく勤るとまをあらく世
乳ばば母へひとまを機嫌ゆゑ「ひとまをところへ私のうをを義理
だてまるも程ぐあるなのまをまりのるい若見那ゑ

ちなみに度も表見をちらつかせ、あの顔世界一見るに十番船へ
乗せ世ばと菓子屋見たる事なれば、松花堂と
からかう唐様がひろふて帳面をつけまゐらせ合点のとこいりと
ゆめも紅まあるものゆゑ中みあるこゝろの浮る紙きれで軍書を
志賀が後をそろそろ士卒の業で大ばくさで麈を
ぐるのぶ肝心その古彩華のくびまあるまちへ十番船へ
いろげい接義を多義と言へば仏崇の方が居玉
生そろそろその時お菓子好るまつぐ囲へ俳諧紙ぶべ私が

かゝ文基をとゝそれくのゝあまあぐあれが殺さうし碁へ強
とぎそ負る小骨ぐを巻る女さう花して出る妻いかゝ高
だへ夷人ちぐひの今度の事もかうまりつけて来鄰がうへ
かゝ人やれその負ぐまぐまもち十番盤をやめて
女房を猪ぐーとうんふまうけてくれぬかトいひー時の
とゝちゝさうの後言をひひー鄰の代麁ふありその面目
ゐさ親も親ゐりまゐもゐくと是その夷人強ゐり
さる程小今まぐ人目も掛ぐ佛家ゐりも悪個馬

や夏人出入をいひつけ上下羽織のひくづき物長合る程あり
れべこ三本傘雪をれ竹失海流しへ安田様を一緒ふ
まくらる日と出る度毎ふえ人引人清千弁のいそ色さ
いそがしくれべ自然拾びあり〳〵暇もなくされば妻をも
おろぢ三男二女をまうけ〳〵かどこゝろお夏ぐ一緒あり母へ
ひくあく楽しき人とゐりて世をさぐろうとゐん

月下大尾

菊巻の下

東都

東都

柳亭種彦著

歌川國貞画

京都

大阪

江戸

寺町佛光寺角　河内屋藤四郎

心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛

長者町壹丁目　加賀屋源助版